新聞　第3種郵便物認可

焼酎粕でバイオマス発電

宇佐の企業 施設完成

「廃棄物」有効利用し840世帯分

焼酎粕を燃料にしたバイオマス発電施設の落成式が、宇佐市であった。処理費用に頭を悩ます酒造会社から焼酎粕を調達し、活用する「エネルギーの地産地消」をめざす。全国でも先駆的な事業だという。

設立したのは、県内でメガソーラー発電事業などを手がける未来電力（宇佐市、末宗秀雄社長）。同市日足のミカン農園跡地約8千平方メートルに、200キロワットの発電機3基や発酵槽、液肥貯蔵槽などを整備した。事業費は約10億円。

発電の仕組みは、焼酎を蒸留したあとに出る液体を発酵させ、発生したメタンガスでタービンを回す。年間発電量は3030メガワット時で、一般家庭約840世帯の年間電力使用量に相当する。九州電力に売電し、年間約1億2千万円の収入を見込む。

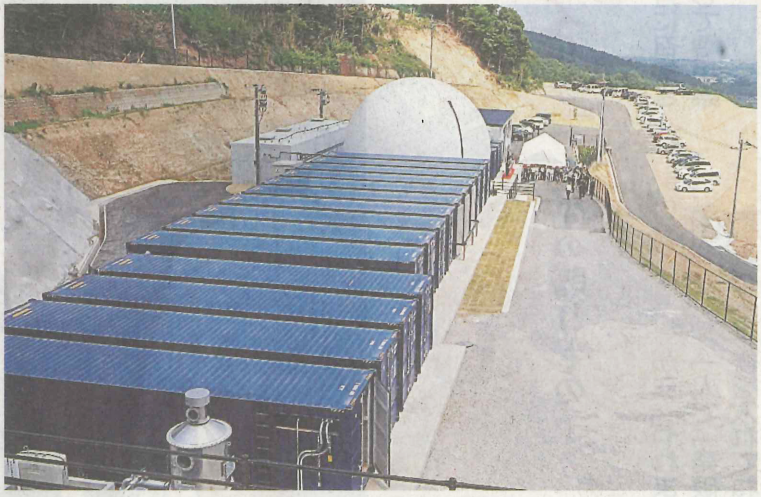
焼酎粕は日量25～30トンを使用する予定で、県内を中心に酒造会社から調達する。焼酎粕は海洋投棄が禁止され、一部が牛や豚の飼料などに使われるほかは、廃棄物として処理されている。

宇佐市安心院町の縣屋酒造では、年間約500トン出る焼酎粕の処理に数百万円をかけているという。重松和孝社長(60)は「零細企業では自前で有効利用することができない。非常にいいことだと思う」と歓迎する。

未来電力では、発酵後に出る「消化液」と呼ばれる液体も液肥などに加工し、地元のミカン農家に無償で提供する。関連企業のカボス農園でも使う予定だ。

未来電力によると、焼酎粕を使った売電目的のバイオマス発電施設は全国でも珍しく、県外の焼酎メーカーからの問い合わせも多いという。末宗秀平専務(29)は「将来は鹿児島や宮崎などに1カ所ずつ設置できたら」と構想を描いている。

（大畠正吾）



焼酎粕を燃料に使ったバイオマス発電施設＝宇佐市日足